



## 第9回 朝日時代小説大賞

長編の時代小説を募集。選考委員は縄田一男、葉室麟、松井今朝子。受賞者には賞金200万円が贈られる。第10回の応募要項はP.066を参照。

| 主催：朝日新聞出版 |



### 諏訪宗篤

すわ・むねあつ

1973年、三重県生まれ。名城大学法学部法学科卒業。趣味は居合(心形刀流)・写真撮影。受賞作の『商人伊賀を駆ける』は、朝日新聞出版より2018年2月上旬に刊行予定。

#### 公募ガイドを傍らに

作家になりたいと思ったのは小学生の時。ゲーム会社、デザイン事務所で作成経験を積んだ二十九歳の私は夢を叶えるため、書店でアルバイトしながら公募ガイド傍らに応募を始める道を選びました。年間計画を立て、資料と現地取材から得た素材をプロットに組み込み、締め切りいっぱいまで書き込みます。全力を尽くすのですが、なかなか結果につながりません。公募ガイドの特集切り抜きファイルだけが厚くなっていきました。ですが数年して朝日時代小説大賞の最終選考に残った一作が転機となりました。大賞には届きませんでした。選評にて私の課題と目指す方向を示して頂いたのです。

それから「宿題」をこなすことに全力を傾けました。ただ、三十半ばを過ぎると周囲は当たり前のように結婚して子供がおり、アルバイト先の書店でも学生らが毎年卒業していきます。普通のことだ。通にできない焦り、将来への不安。周りからの声は耳を塞ぐことができても、自分の内からの声を消すことはできません。さらに書店が事業縮小し、私は解雇されました。目の前が真っ暗になりました。ですが衝撃から立ち直ると、それもまた転機と考えました。溜まっていた有給休暇をすべてつぎ込んで、翌日から執筆に没頭したのです。テーマは家康の伊賀越え。突然の危局。右も左もわからぬ中、周囲は敵ばかり。生き残るには駆け抜けるしかないとは私自身の思いでもありました。そして書き上

がると、即応募したい気持ちを抑えて寝かせておきました。客観的に読めるまで時間を置き、誤字脱字、不自然な箇所を修正することで、作品をより良いものにしたかったのです。次のアルバイト先を決め、冷静な頭でさらに面白くなるように書き直しました。そして応募した作品が、大賞を頂きました。四十三歳の秋。十四年に渡った「重荷を背負うて長き道を行くが如し」です。取材にて家康が通ったとされる道を実際に辿り、当時の雰囲気を残す道を求めて危うく遭難しかけたのも、今ならば笑い話にできます。ただ、頂いた「宿題」はまだまだ完遂していません。そしてこれからも、より良い作品を、たくさん書いていきたいと考えています。私の道はまだ遠く続いています。

#### ★ 受賞作品 ★

#### 『商人伊賀を駆ける』

天正10(1562)年6月2日、京の商人茶屋四郎次郎は本能寺の変がもたらした混乱から家康一行を無事に帰還させんと先導する。だが伊賀越えの山道は険しく、周囲は命を狙う敵ばかりであった。



Q. 時代小説を書き始めたきっかけは何ですか？

A. 海音寺潮五郎先生の影響が大きいです。長編短編随筆、どれも品格高く気概に満ち、読む度に発見があります。『孫子』は文庫版を読み込んだ末に、愛蔵版を買い直しました。私の憧れ、そして目標とする方です。